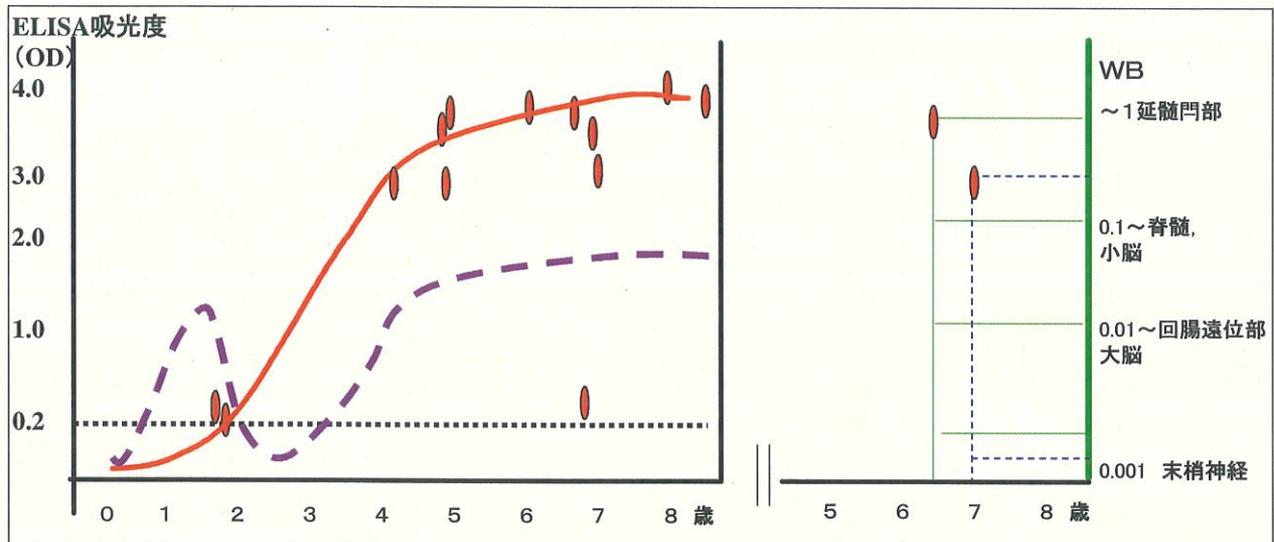


③日本の BSE 検査データ

日本において、これまで約 390 万頭の BSE 検査の結果、14 頭の BSE 感染牛を確認した。そのうち、8 及び 9 例目は若齢牛で OD 値（ELISA による吸光度値）は検出限界に近い値であったが、WB（ウエスタンブロット法）での結果から、若齢牛の延髄門部に蓄積した異常プリオンたん白質の量は成牛陽性例のほぼ 500 ～ 1,000 分の 1 と推測される。また、5 及び 11 例目の WB の結果（図 2）から、門部を 1 としたときの異常プリオンたん白質量は、せき髄・小脳は 1/10、大脳・回腸遠位部は 1/100 以下、末梢神経は 1/1,000 程度と推定される。

なお、このデータは限られた数のデータであり、今後、と畜場で実用可能なより感度の高い検査法が開発された場合には、本評価の見直しを検討する必要がある。



実線（赤）：BSE 検査陽性牛における ELISA の O.D. 値
破線：英国における感染実験からの推定

実線（緑）：5 例目の各臓器の異常プリオンたん白質量
破線（青）：11 例目の各臓器の異常プリオンたん白質量

図 2 BSE 検査陽性牛の ELISA 及び WB による定量評価

④飼料規制の効果

英国における飼料規制の効果として、BSE 発症牛の生まれ年（3 年間の平均）でみると、1988 年の肉骨粉使用禁止による規制後 3 年間の平均の BSE 発症頭数は規制前の 3 年間の平均発症数の 0.29 に減少し、1996 年の完全禁止によって、完全禁止後 3 年間の平均の BSE 発症頭数は完全禁止前 3 年間の平均発症数の 0.02 に減少している。また、スイスについては、BSE の潜伏期を考慮して、規制後 5 年の BSE 陽性牛数